A Study of the Present Situations and Problems on Teaching Expressive Movements in Elementary School in Ishikawa Prefecture

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/611

小学校における表現運動指導の現状と課題
－石川県を対象として－

吉　川　京　子

A Study of the Present Situations and Problems on Teaching Expressive Movements in Elementary School in Ishikawa Prefecture

Kyoko YOSHIKAWA

はじめに

生涯学習や個性化教育という教育の基本方針に基づき，平成元年度の学習指導要領の改訂では，中学校，高等学校の保健体育においては，運動種目の選択制が導入された。

体育科が内容とする運動文化は，健全な身体の保持と増進を目的として人為的に生み出された文化であるところの「体操」，遊びをルーツにもつ欲求に基づいて行われる自然運動であり，達成，競争，克服の楽しさや喜びを見いだす文化であるところの「スポーツ」，変身願望を動機とした遊びとしての性格をもちながらも，身体の美的表現を課題とする文化であるところの「ダンス」から構成されているが，子どもの運動に対する欲求をベースにして選択制を拡大していけば，従来発達的価値の観点から評価されてきた体操，器械運動，陸上競技，水泳などの個人的運動や，芸術的・表現的価値をもつダンスなどが選択されず，体育カリキュラムは球技に独占されていく可能性があるという問題が早くも指摘されている[7]。

小学校の体育には，選択制の導入はされておらず，小学校での学習内容が，中学での運動種目の選択の基盤となる。

小学校１・２年における模倣の運動，３～６年の表現運動は，中学校におけるダンスに繋がる種目である。従って，小学校でどのような表現運動を経験できたかが，中学校における選択を決定する上で重要であると考えられる。

ダンス・表現運動は，指導が難しいという点で，教師から敬遠されがちな種目とされてきた。そこで，日本教育大学協会全国保健体育研究部門の専門部会である全国舞踊研究会は，教員養成大学におけるダンスの専門教育改善のため，ダンス・表現運動に対する教師の意識調査を実施した[2)3)6)]。

本研究では，全国調査の一翼を担った石川県について分析し，石川県の小学校教員における表現運動に対する意識及び指導の現状を明らかにし，表現運動指導に関わる問題点を明らかにすることを目的とする。

Ⅰ．方法

1．対象：石川県内の公立小学校教員376 名
2．調査期間：平成３年11月11日～30日
3．調査方法：郵送による質問紙調査

表１　調査対象

NO.	郡市	学校数	配布数	回答数	回収率
1	加賀市	18	36	28	77.8
2	江沼郡	3	6	6	100.0
3	小松市	25	50	40	80.0
4	能美郡	11	22	21	95.5
5	石川郡	16	32	19	59.4
6	松任市	9	18	13	72.2
7	金沢市	56	112	74	66.1
8	河北郡	18	36	34	94.4
9	羽咋市	9	18	14	77.8
10	羽咋郡	18	36	34	94.4
11	七尾市	10	20	16	80.0
12	鹿島郡	15	30	19	63.3
13	輪島市	8	16	14	87.5
14	鳳至郡	14	28	20	71.4
15	珠洲市	10	20	18	90.0
16	珠洲郡	3	6	6	100.0
計		243	486	376	77.4

平成８年９月17日受理

石川県内の公立小学校全校の校長宛に，各校男女各１名の教員に対する質問紙調査を依頼した。学校数243，配布数486，回答数376，回収率77.4%であった（表１）。

４．調査内容

調査項目は，以下の観点より構成した。

(1) 対象者の属性：性別，年齢，教職年数，専攻教科

(2) ダンス経験：学校教育におけるダンス履修経験

(3) 創作ダンスの大学時履修経験：履修期間，履修前後の変化，履修後の印象

(4) ダンスに対する意識：ダンスの好嫌，ダンスの指導観，ダンスの教材観

(5) 創作ダンス指導の現状：指導実践，指導の好嫌，指導計画能力，指導の障害，習得希望，講習会参加，授業研究

５．分析方法

分析には，PC-9801LX を使用し，データー解析ソフトHALBAUを用いて，カテゴリ頻度を求め，クロス集計，χ^2検定を行った。

II．結果及び考察

１．対象者の属性

表２　対象者の属性

項目		人数	%
性別	男性	181	48.1
	女性	195	51.9
年齢	20歳代	117	31.1
	30歳代	177	47.1
	40歳代	67	17.8
	50歳以上	15	4.0
教職年数	０～４年	81	21.5
	５～９年	103	27.4
	10～14年	88	23.4
	15～19年	58	15.4
	20～24年	27	7.2
	25～29年	11	2.9
	30年以上	8	2.1
専攻教科	保健体育	105	27.9
	国語	38	10.1
	数学	33	8.8
	社会	62	16.5
	理科	20	5.3
	技術・家庭	9	2.4
	音楽・美術	11	2.9
	その他	69	18.4
	不明	29	7.7
総数		376	100.0

表２に対象者の属性を示した。

(1) 性別

男女の割合は，男性48.1%，女性51.9%であり，男女ほぼ同数の回答が得られ，対象者に，性の偏りは見られない。

(2) 年齢

年齢は，30歳代が47.1%と約半数を占め，続いて20歳代が31.1%，40歳代が17.8%，50歳以上が4.0%であった。20歳代・30歳代で全体の78.2%を占めており，若い年代の教員が多い。

(3) 教職年数

教職年数は，０～４年が21.5%，５～９年が27.4%，10～14年が23.4%，15～19年が15.4%，20～24年が7.2%，25～29年が2.9%，30年以上が2.1%であった。

10年未満の教員が48.9%と約半数を占め，10年以上20年未満が38.9%，20年以上は12.2%であり，教員歴が比較的浅いものから中堅の教員が多い。

(4) 専攻教科

専攻教科は，保健体育が27.9%，社会が16.5%，国語が10.1%，数学が8.8%，理科が5.3%，音楽・美術が2.9%，技術・家庭が2.4%と，多教科にわたっていた。

対象者の属性(1)～(4)に関しては，全国調査と同じ傾向であった。

２．表現運動・ダンスの履修経験

小学校，中学校，高等学校，大学において，

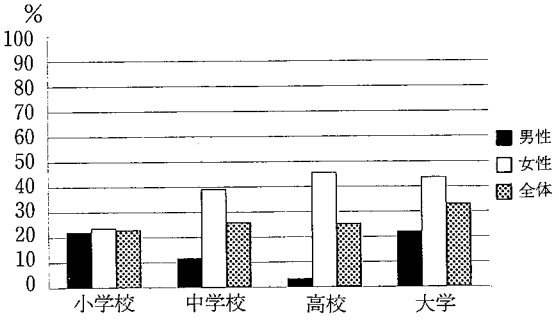

図１　表現運動・ダンスの授業経験

表現運動・ダンスの授業を受けた経験のある教員の割合を図１に示した。

小学校における表現運動の経験は，22.9%（男性22.1%，女性23.6%），中学校におけるダンス経験は，25.8%（男性11.6%，女性39.0%），高校におけるダンス経験は，25.3%（男性3.3%，女性45.6%），大学における表現運動・ダンス経験は，33.2%（男性22.1%，女性43.6%）であり，全国と同様な傾向であった。

小学校から大学まで表現運動・ダンスの履修経験が全くない教員が，42.3%（男性56.4%，女性29.2%）と半数近くに及び，指導実践を促す上での問題と考えられる。

３．表現運動・創作ダンスの大学時履修経験

(1)　履修期間

創作ダンスの大学時履修期間を，図２に示した。

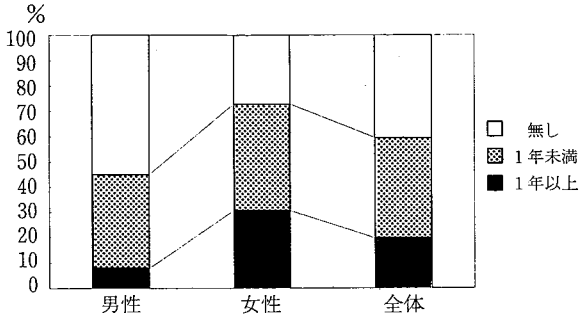

図２　履修期間

大学での表現運動・創作ダンスの履修経験が１年以上ある教員が，19.7%（男性7.8%，女性30.8%），１年未満が，39.7%（男性37.2%，女性42.1%），履修経験が全くない教員が，40.5%（男性55.0%，女性27.2%）であった。

全国では，１年以上，経験なし共に約３割であるのに比べ，石川県は，履修経験が１年以上の教員の割合が少なく，履修経験が全くない教員の割合が多い。

(2)　履修後の意識変化

履修経験者において，履修前後で表現・創作に対する興味・関心・価値観がプラスに変化した者は，54.0%（男性48.8%，女性57.0%），変わらなかった者は，42.4%（男性46.3%，女性40.1%），マイナスに変化した者は，2.7%（男性3.7%，女性2.1%）であった（図３）。

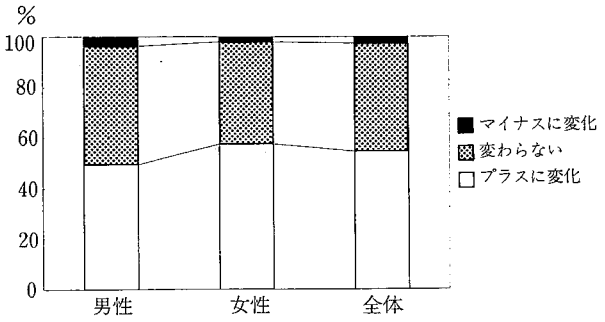

図３　履修後の意識変化

大学時の表現運動・創作ダンスの履修は，履修者の５割以上に表現・創作に対する肯定的変容をもたらしており，全国と同様であった。

４．ダンス・表現運動に対する意識

(1)　ダンスの好嫌

ダンスの「踊る」「創る」「観る」活動それぞれに対する好き嫌いを図４に示した。

「踊ることは好き」は，43.9%（男性27.6%，女性59.0%），「創ることは好き」は，11.7%（男性6.1%，女性16.9%），「観ることは好き」は，39.4%（男性28.7%，女性49.2%），「どれも嫌い」は，3.5%（男性6.6%，女性0.5%），「どちらとも言えない」は，26.9%（男性39.8%，女性14.9%）であった。

「どれも嫌い」な教員が少ない一方，「踊るこ

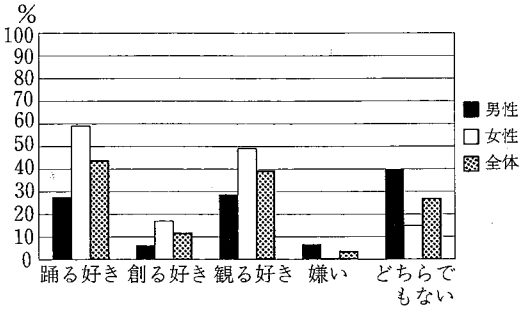

図４　ダンスの好嫌

と」「観ること」に比べ，「創ること」が好きな教員が少ないことは，全国と同様な傾向であった。

(2) 表現運動の指導観

表現運動を児童にさせたい教員は，61.2%(男性55.2%，女性66.7%)，自信を持って指導できる教員は，7.2%（男性5.0%，女性9.2%），指導している教員は，35.4%（男性34.3%，女性36.4%），踊れる教員は，27.1%（男性12.7%，女性40.5%）であった（図5）。

全国では，約4割が踊れ，約5割が指導していたのに比べ，踊れる教員，指導している教員が少ない。表現運動を児童にさせたいと考えている教員が6割以上いる一方で，指導に自信のある教員は約1割と僅かである状況は，全国と同様であった。

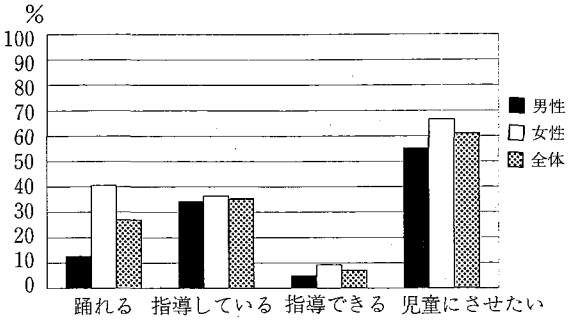

図5　表現運動の指導観

(3) 表現運動の教材観

表現運動は，児童にとって大切だと考えている教員は，94.4%（男性90.6%，女性97.9%）であった（図6）。

全国と同様，9割以上の教員が，表現運動は，児童にとって大切だと認識していた。

大切な理由として，1)「リズムにのって体力づくりができる」(19.4%)，2)「表現・伝達の喜びを体験できる」(14.1%)，3)「感情を豊かにする」(13.8%)，「想像性・創造性豊かな人間を育てる」(8.5%)，「仲間との共感の時間が持てる」(6.2%) が上位であり，全国と同様な傾向であった。

一方，体育の中で表現運動を重視している教員は，7.4%（男性6.1%，女性8.7%）（図6），重視していない教員は，33.5%（男性40.9%，女性26.7%）であった。

全国では，重視していない教員が約2割であったのに比べ，石川県では，表現運動を重視していない教員の割合が多い。

重視していない理由として，「自分に体験がない」ことを挙げた教員が，43.5%（男性44.6%，女性42.3%）と最も多く，全国と同様であった。

5．表現運動指導の現状

(1) 表現運動の指導実践

表現運動の指導形態及び年間授業時間を表3に示した。

①カリキュラム

表現運動が組み込まれているカリキュラムは，「運動会の中に」が，70.2%と最も多く，「授業として」は，44.1%であった。全く行われていない学校が3.5%見られた。

全国では，授業，運動会共に約6割が実施していたのに比べ，石川県は，運動会で行われている割合が高く，授業として取り組んでいる割合が少ない。

②発表会

表現運動の発表会を実施している学校は，54.8%であり，全国の約7割に比べ，発表会の実施率が低い。

発表会を「授業の中で」実施しているのが，23.4%，「学年単位」が，11.4%，「学校単位」が，10.1%であった。「学年単位」「学校単位」

表3　表現運動の指導実践

項目	%
カリキュラム	
授業	44.1
運動会	70.2
行事	8.2
その他	2.4
無し	3.5
発表会	
授業	23.4
学年単位	11.4
学校単位	10.1
地域	2.4
その他	7.4
無し	45.5
年間時間	
16時間以上	3.1
10～15時間	31.3
10時間未満	65.0

の実施率は，全国と同様であったが，全国では，約４割が「授業の中で」実施しているのに比べ，石川県では，授業での発表会の実施率が低い。

③年間授業時間

表現運動の年間授業時間は，10時間未満が65.0%，10－15時間が31.3%，16時間以上が3.1%であった。

文部省指導書の領域別時間のめやすでは15%（約16時間）とされているが，この時間で実施されていたのは，僅か3.1%であった。全国でも4.0%の実施であり，全国と同様，表現運動の年間授業時間は，めやすにはほど遠いものであった。

④授業実践

この１年間に表現運動の授業を実践した教員は，42.6%（男性38.7%，女性46.2%）であった（図６）。

約６割が実践していた全国に比べ，石川県では，表現運動を実践した教員が少ない。

(2)　表現運動指導の好嫌

表現運動の指導が好きな教員は，48.4%（男性42.0%，女性54.4%）（図６），嫌いな教員は，48.1%（男性53.6%，女性43.1%）であった。

好きな教員が約７割，嫌いな教員が約３割であった全国に比べ，石川県では，表現運動の指導に抵抗を感じている教員が多く，指導に好感を持っている教員が少ない。

指導が好きな理由として，１）「子供の生き生きとした表現に触れ素晴らしさを味わえる」（42.9%），２）「ダンス経験から楽しさや素晴らしさを知っている」（20.3%），３）「自分が楽しい」（14.3%）が上位であった。

指導を通して触れられる児童の生き生きとした表現や，自らの楽しいダンス経験が指導の原動力となっており，全国と同様な傾向であった。

(3)　指導実践上の問題

①授業計画能力

表現運動の授業計画を組むことのできる教員は，39.1%（男性39.2%，女性39.0%）であった（図６）。

全国では，約６割ができると回答しているのに比べ，石川県では，表現運動の授業計画能力に自信がない教員が多い。

②指導の障害

表現運動に取り組む際の障害として，１）「生徒が動かない」（13.8%），２）「自分で動いてみせられない」（11.7%），３）「助言の仕方がわからない」（8.8%）が上位であり，全国と同様であった。

指導の障害として，教師における問題を挙げている教員は，39.6%（男性39.8%，女性39.5%），生徒における問題を挙げている教員は，18.6%（男性18.8%，女性18.5%），環境における問題を挙げている教員は，13.8%（男性10.5%，女性16.9%）であった（図７）。

指導の障害を，教師側に捉えている教員が最も多いという点では，全国と同様であったが，全国では，約２割であったのに比べ，石川県では，指導者側の問題を挙げる教員の割合が多い。

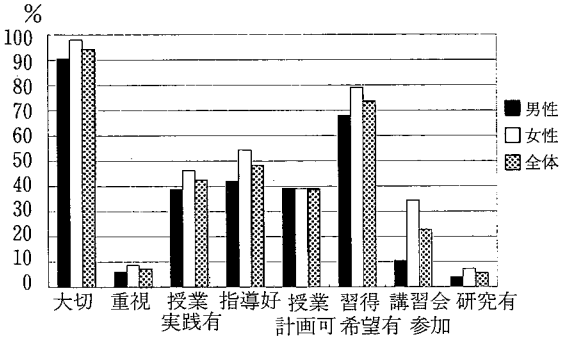

図６　表現運動指導

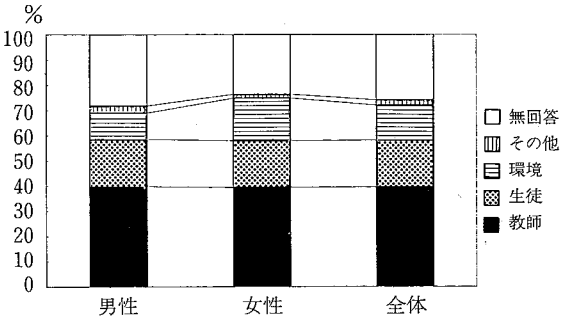

図７　指導の障害

③習得希望

表現運動指導で，今後身につけたいことがある教員は，73.7%（男性68.0%，女性79.0%）であった（図６）。

約５割の教員が習得を希望していた全国に比べ，石川県は，習得希望の教員の割合が多い。

習得希望内容は，１)「本人の実技能力を高める」(22.7%)，２)「助言の仕方」(17.3%)，３)「児童の題材の選び方」(13.4%)が上位であり，全国と同様であった。

④研修

過去１年間にダンス・表現運動の講習会に参加したことのある教員は，22.9%(男性10.5%，女性34.4%）であった（図６）。

全国では，約３割の参加であり，それに比べ，やや低い。

表現運動の研究指定校となったことがある，または，研究テーマとしたことがある教員は，5.6%(男性3.9%，女性7.2%)であった(図６)。

表現運動の授業研究に取り組む教員が非常に少ない状況は，全国と同様であった。

６．性差

以上の２.～５.の結果に関して，男女教員間での違いについて，χ^2検定を行った結果，有意差(P<0.05)が認められた項目は，履修経験(中学，高校，大学)，大学時履修期間，ダンスの好嫌（踊ること好き，創ること好き，観ること好き，どれも嫌い，どちらとも)，指導観(児童にさせたい，教員自身が踊れる)，教材観（大切，重視)，指導（指導の好嫌，習得希望の有無)，研修（講習会参加の有無）であった（表４)。

履修経験については，小学校での表現運動の経験に男女教員で違いはないが，中学，高校，大学での履修経験は男女教員に違いあり，男性教員は，女性教員に比べ，中学，高校，大学でのダンス経験者が少ないと言える。これは，平成元年度の指導要領の改訂で，ダンスは，男女共修となったが，それ以前では，中高では，ダンスは，主として女子に指導することとなっていたためと考えられる。

表４　性差及び大学時履修経験による差（＊：p<0.05）

項目		性差	履修差
履修経験	小学		
	中学	＊	
	高校	＊	
	大学	＊	
大学	履修期間	＊	
	履修後の意識変化		＊
好嫌	踊ること好き	＊	＊
	創ること好き	＊	＊
	観ること好き	＊	＊
	どれも嫌い	＊	＊
	どちらとも	＊	＊
指導観	児童にさせたい	＊	＊
	自信を持って指導		＊
	指導している		＊
	踊れる	＊	＊
教材観	大切	＊	
	重視	＊	＊
指導	授業実践		＊
	指導の好嫌	＊	＊
	授業計画能力		＊
	指導の障害		
	習得希望	＊	
研修	講習会参加	＊	＊
	研究		

大学時の表現運動・創作ダンスの履修経験については，男女教員に違いがあり，男性教員は，女性教員に比べ，経験のない者が多く，履修期間が１年以上の者が少ないと言える。履修後の意識の変化は，男女教員で違いは，認められなかった。

ダンスの好嫌については，男女教員に違いがあり，ダンスを踊ること，創ること，観ることは，男性教員に比べ，女性教員に好きな者が多いが，どれも嫌い，どちらとも言えない教員は，女性教員に比べ，男性教員に多いと言える。

指導観については，自信を持って指導できる教員，指導している教員は，男女に違いが認められず，児童にさせたい教員，踊れる教員は，男女に違いがあり，男性教員に比べ，女性教員は，児童にさせたい教員，踊れる教員が多いと言える。

教材観については，男女教員で違いがあり，男性教員に比べ，女性教員は，表現運動は，大切であると考えている者が多く，重視している者が多いと言える。

指導については，授業実践，授業計画能力，

指導の障害には，男女教員で違いが認められなかった。指導の好嫌，習得希望に男女教員で違いがあり，男性教員に比べ，女性教員に指導が好きな者が多く，習得希望者が多いと言える。

研修については，講習会の参加に，男女教員に違いがあり，男性教員は，女性教員に比べ，講習会への参加者が少ないと言える。研究への取り組みは，男女教員で違いが認められなかった。

7．大学時履修経験による差

3.(2)～5.の結果に関して，大学時履修経験による違いについて，χ^2検定を行った結果，有意差（$P<0.05$）が認められた項目は，履修後の意識変化，ダンスの好嫌（踊ること好き，創ること好き，観ること好き，どれも嫌い，どちらとも），指導観（児童にさせたい，自信を持って指導できる，指導している，教員自身が踊れる），教材観（重視），指導（授業実践，指導の好嫌，授業計画能力），研修（講習会参加）であった（表4）。

履修後の意識の変化は，「プラスに変化」した者は，1年以上の履修では，70.3%，1年未満の履修では，46.0%，「変わらない」者が，1年以上では，25.7%，1年未満では，51.0%，「マイナスに変化」した者が，1年以上で2.7%，1年未満で2.7%であった（図8）。1年以上の履修者と1年未満の履修者に違いが認められ，1年以上の履修者は，1年未満の履修者に比べ，プラスに変化した者が多く，1年未満の履修者は，1年以上の履修者の比べ，変化しない者が多い。従って，履修期間を1年以上とすることは，ダンス・表現運動に対する肯定的な変容を及ぼす上で，有効であると考えられる。

ダンスの好嫌については，1年以上，1年未満，無し，それぞれ，「踊ることが好き」は，59.5%，45.0%，34.9%，「創ることが好き」は，28.4%，10.7%，4.6%，「観ることが好き」は，51.4%，40.3%，32.2%，「どれも嫌い」は，1年以上には見られず，1年未満で2.0%，無しで6.6%，「どちらとも言えない」は，それぞれ，14.9%，28.2%，31.6%であった（図9）。「踊る」「創る」「観る」に対して好感を持っている教員は，履修経験が無し，1年未満に比べ，1年以上に多く，逆に，「嫌い」「どちらとも言えない」は，履修経験のない教員に多い。「嫌い」は，履修経験が1年以上の教員には，見られなかった。従って，履修期間の増加は，ダンスに対する好感を養う上で，有効であると考えられる。また，「創る」「どちらとも言えない」に関しては，無しと1年未満の差よりも，1年未満

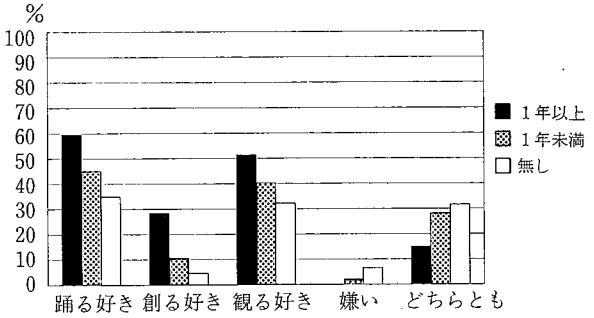

図9　履修経験の違いによるダンスの好嫌

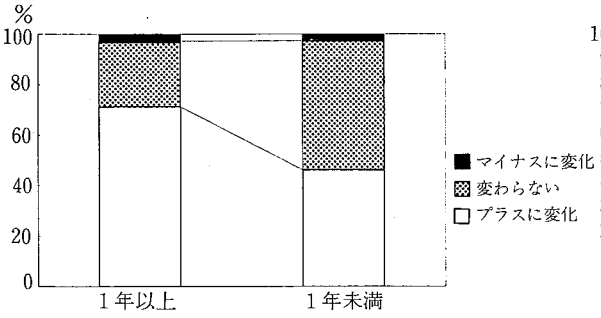

図8　履修期間の違いによる履修後の意識変化

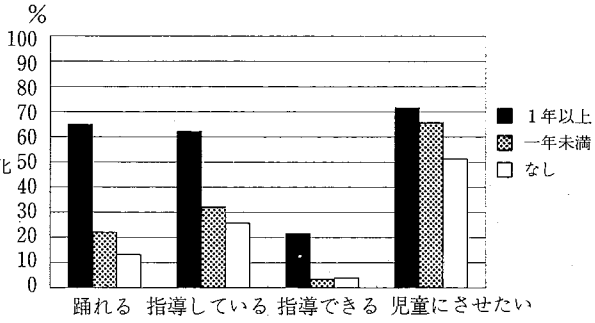

図10　履修経験の違いによる表現運動の指導観

と１年以上の差の方が大きいことから，１年以上の履修が，好感を養う上で，より強く影響を及ぼすと考えられる。

指導観については，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，「踊れる」が，64.9%，22.1%，13.2%，「指導している」が，62.2%，32.2%，25.7%，「指導できる」が，21.6%，3.4%，3.9%，「児童にさせたい」が，71.6%，65.8%，51.3%であった(図10)。「踊れる」「指導している」「指導できる」「児童にさせたい」教員は，履修経験が１年未満，無しに比べ，１年以上に多い。また，「踊れる」「指導している」「指導できる」は，無しと１年未満の差に比べ，１年未満と１年以上での差が顕著であることから，実技能力，指導力をつけるには，１年以上の履修が有効であると考えられる。教材観については，表現運動は，児童にとって大切だと考えている教員は，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，99.0%，95.0%，91.0%であり(図11)，履修経験の違いによる差は認められず，経験に関わらず，9割以上の教員が大切だと認識している。重視している教員は，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，18.0%，5.4%，4.6%であり(図11)，１年以上と１年未満での差が大きい。従って，１年以上の履修が表現運動を重視させる上で有効であると考えられる。

指導については，この１年間に表現運動の授業を実践した教員は，１年以上，１年未満。無し，それぞれ，58.1%，38.9%，38.2%，表現運動の指導が好きな教員は，64.9%，47.7%，40.8%，授業計画を組むことができる教員は，67.6%，31.5%，32.2%であり(図11)，どれも，履修経験が１年以上と１年未満での差が大きい。従って，１年以上の履修が，授業実践，指導することへの好感，授業計画能力の向上に有効であると考えられる。指導の障害は，教師側にあると考えている教員が，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，36.5%，38.3%，42.8%，生徒側にあると考えている教員が，20.3%，20.1%，16.4%，環境にあると考えている教員が，21.6%，8.7%，15.1%であり，履修経験の違いによる差は認められず，履修経験に関わらず，指導の障害を教師側に捉えている教員が多く，生徒側，環境にも障害を感じている。習得希望は，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，83.8%，71.8%，70.4%であり(図11)，履修経験による差は認められず，履修経験に関わらず，7割以上の者が，習得を希望している。

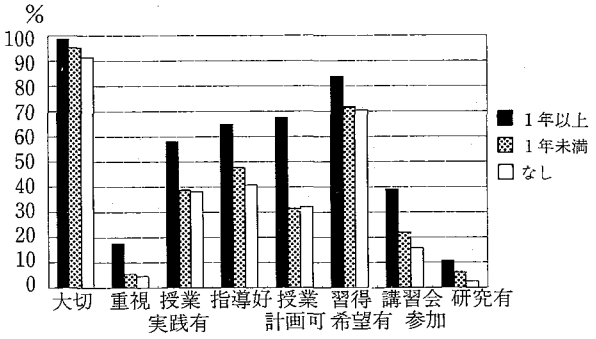

図11　履修経験の違いによる表現運動指導

研修については，講習会に参加したことのある教員が，１年以上，１年未満，無し，それぞれ，39.2%，22.1%，15.8%であり(図11)，履修経験１年未満，無しに比べ，１年以上の教員の参加が多い。従って，１年以上の履修は，教員の自己研鑽の場である講習会への参加を高める上で，有効と考えられる。表現運動の授業研究を行ったことがある教員は，履修経験の違いによる有意な差は認めらず，履修経験に関わらず，１割以下と低い（図11)。

III. 表現運動指導実践に関わる問題点

表現運動の年間授業時間が，文部省指導書の領域別時間のめやすに達していたのは，僅か3.1%であり，表現運動の年間授業は，めやすにはほど遠いものであり，表現運動の授業時間の拡充が望まれる。

この１年間に表現運動の授業を実践した教員が，全国では，約６割であったのに比べ，石川県では，約４割と実施率が低い。また，全国では，授業としても，運動会の中にも，共に約６割が表現運動を取り扱っていたのに比べ，石川

県では，運動会で行われている割合が約7割と高く，授業として取り組んでいるのは，約4割と低い。更に，全国では，発表会を約7割が実施しているのに比べ，石川県では，約5割と実施率が低く，授業実践の推進が望まれる。

全国では，表現運動の指導が好きな教員は，約7割，嫌いな教員は，約3割であったのに比べ，石川県では，好きな教員，嫌いな教員共に約5割と，表現運動の指導に抵抗を感じている教員が多い。踊ること，観ること，共に約4割が好きであるのに比べ，創ることが好きな教員は，約1割と少なく，創ることに抵抗を感じている教員が多いことは，全国と同様な傾向であった。創ることに抵抗を感じている教員が多いということは，児童に創る喜びを経験させる上での障害となり得，表現運動の内在的価値の実現を児童から奪う危険性を孕んでいる。

表現運動は，児童にとって大切だと認識している教員が，9割以上であるにもかかわらず，重視している教員は，1割にも及ばず，重視していない理由として，体験がないことを挙げる教員が，約4割を占めた。また，表現運動を児童にさせたいと考えている教員が，約6割である一方で，指導に自信のある教員は約1割と僅かであった。表現運動の授業計画能力を有する教員が，全国では，約6割であったのに比べ，石川県では，約4割と少なく，表現運動指導の障害は，教員自身にあると捉えている者が，約4割と，全国の約2割に比べ多く，指導力を向上させる必要がある。

習得希望者が約7割と，全国の約5割に比べ多く，また，講習会への参加経験者も約2割と，全国の約3割に比べ低いことから，講習会の開催が望まれる。

表現運動指導において，性差が認められたが，それは，履修経験の違いによるものとも考えられた。従って，男性教員への研修の機会を提供することが必要である。

大学時の1年以上の履修経験は，表現運動に対する肯定的な変容を及ぼし，好感を抱かせ，実技能力，指導力，授業計画能力を向上させ，指導に好感を持ち，表現運動を重視し，現場での授業実践，自己研鑽の場への参加に繋がることが，明らかになった。従って，1年以上の履修を保証することが，表現運動の指導を充実させる上で必要である。

付記

本研究は，日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門・全国舞踊研究会のプロジェクト研究「ダンス指導実践に関わる現職教員の意識」に関する全国調査の一部であり，石川県について分析したものである。全国舞踊研究会会員ならびに石川県内の各校調査協力者，関係各位に深く感謝いたします。

参考文献

1) 安藤幸，中村久子：表現運動指導の現状と問題点—四国地区小学校教員を対象として—，鳴戸教育大学研究紀要（生活・健康編），9，1－14，1994.
2) 松本富子，高橋和子，茅野理子，細川江利子，佐分利育代，廣兼志保，畑野裕子：現職教員のダンス指導実践に影響を及ぼす要因の検討—大学時履修経験が与える影響について—，舞踊学，16，12－23，1994.
3) 松本富子，高橋和子，茅野理子，細川江利子，佐分利育代，廣兼志保，畑野裕子：ダンス指導の現状と課題，アジア国際舞踊会議発表論文集，74－84，1993.
4) 三浦弓杖：舞踊教育で今何が問題か，体育科教育，43，7，10－13，1995.
5) 文部省：小学校学習指導要領，大蔵省印刷局，98－104，1989.
6) 鈴木江利子，高橋和子，川口千代，吉川京子：ダンス指導実践に関わる現職教員の意識—高等学校を対象として—，埼玉大学教育実践研究指導センター紀要，8，39－47，1995.
7) 高橋健夫：生涯学習時代の運動文化のあり方を考える—体育科における体操，スポーツ，ダンスの位置づけについて—，体育科教育，43，7，14－17，1995.
8) 吉川京子：中学校・高等学校におけるダンス指導の現状と課題—石川県を対象として—，金沢大学教育学部紀要，教育科学編，45，97－107，1996.